

史料紹介 青蓮院門跡所蔵

『門葉記』『長日如意輪法六』について

袁 也

はじめに

『門葉記』（以下、『門』と略記する）は、天台三門跡の一つ青蓮院門跡の、天永年中（一一一〇—一一三）より応永年中（一三九四—一四二八）に至る、約三百年間にわたっての諸記録を集大成したものである。⁽¹⁾十四世紀前半に青蓮院門跡であった尊円入道親王がまとめたものであり、尊円死後も補筆された。⁽²⁾古代・中世の天台宗研究・延暦寺（以下、山門と表記する）研究・青蓮院門跡研究を行う上で必要不可欠な史料として知られる。

本稿では、『門』原本の写真（東京大学史料編纂所架蔵写真帳、請求記号六一七二—一）のうち、「長日如意輪法六」の翻刻および史料紹介を行い、併せて近世写本にも言及する。

『門』は、『大正新脩大藏経』（大蔵出版、一九三四）「図像部」の第十一、十二に翻刻、収録されており（以下、大正蔵本とする）、一般

的には大正蔵本が広く利用されている。大正蔵本は青蓮院門跡所蔵の近世写本⁽³⁾を底本としているものの、本稿で取り上げる「長日如意輪法六」の部分は闕となっており、大部分は翻刻されていない。⁽⁴⁾後述のように、「長日如意輪法六」には、平安・鎌倉期の護持僧（内裏清涼殿二間で天皇護持のために常に祈禱を行う天台（山門、寺門より選出）・真言僧）に関する内容が詳細に記されており、独自の記事が多いため、護持僧および山門僧研究を行う上での貴重な史料である。そのため、「長日如意輪法六」を紹介・全文翻刻することは、護持僧研究を深化させるのみならず、『門』の史料論、青蓮院門跡研究ないし山門研究の発展にも寄与するものと考えられる。⁽⁵⁾

そこで以下、本稿では「長日如意輪法六」の内容、作成者、成立時期等について述べるとともに、全文翻刻を掲載する。

一、『門』『長日如意輪法六』の内容・作成者・成立時期

「長日如意輪法六」の装丁は『門』原本の他巻と同じく、卷子袋である。史料編纂所所架蔵写真帳を見る限り、少々虫損があるものの、保存状態は非常に良好にみえる。所々に、文字の抹消と修正がある。表紙の左上（天）には「護持僧条々」とみえ、左下（地）に「六」と書かれている。本来の史料名としては「護持僧条々」であり、「六」は本巻の番号と考える（このように判断した理由は後述する）。見返しには「文和元年十二月下旬、書進^{（三十四）} 禁裏之草本也」という記述がある。

本文では、最初に以下のような総目が記されている。

① 「濫觴事」…桓武天皇期から後冷泉天皇期までの護持僧を収録している。山門、東寺、寺門（園城寺）の、いわゆる「三流」の護持「元祖」としての最澄、空海、円仁、円珍の護持記事を時代順に列挙し、続いて各時期の護持僧の名前を記している。

② 「代始護持僧事」…後三条天皇期から崇光天皇期までの代始護持僧（天皇の即位前後に補任される、長日三壇御修法（長日如意輪法、長日不動法、長日延命法）を勤修する正壇護持僧を指す）を収録している。各天皇は「□□院」と表記され、その下に受禪と即位の日付が掲載されている。その後、各天皇の代始護持僧の名前を挙げ、一部の僧侶を除き、ほとんどの僧侶の名前下に小字で護持僧となった日付と長日三壇御修法の内容を記している。護持僧の所属宗派は名前の右傍で「山」（山門）・「寺」（寺門）・「東」（東寺）と表記されている。^{（七）}

③ 「被仰護持事」…護持僧となった時の勅使参向、繪旨発給などについての補任手続きを記している。尊性、慈助などの山門門跡僧の護持僧補任についての先例を引用している。

④ 「二間初参事」…護持僧補任後の清涼殿二間初参の詳細な作法を記している。天台護持僧の初参の先例を引用している。

⑤ 「長日三壇御修法事」…後三条天皇即位後から始まる長日三壇御修法の由緒、御請の手続き、修法の御本尊および支物、花注連などに関する作法と規定を記している。山門護持僧の先例を引用している。

⑥ 「護持勞事」…護持僧勞に関する規定と先例を記している。

⑦ 「護持僧必勤修御祈事」…護持僧として必ず勤修すべき修法に関する規定を記している。山門護持僧が水天供を勤修する先例を引用している。

⑧ 「護持僧供御調進事」…禁裏で護持僧に対する供御を規定している。

⑨ 「加任護持僧事」…加任護持僧（天皇の在位中に随時補任される夜居を務める護持僧を指す）の任命、二間初参の作法、花注連などに関する先例や規定を記している。

⑩ 「春宮護持僧事」…春宮護持僧の任命と修法内容を記している。

以上のように、本史料には、特に山門護持僧の補任・修法と儀式の先例・故実の作法などがよくまとめられている。

さらに、摂関期の公卿藤原行成の『権記』治安三年（一〇二三）六月の記事、院政期初期の実務官僚藤原為房の『為房卿記』寛治元年（一〇八七）二月十九日条の記事、平安末期・鎌倉初期において活躍した公卿平親範の『親範記』の記事（年紀不明）を所収している。そ

のため、本史料は古記録の記事を復原できる面でも価値がある。⁽⁸⁾

次いで、「長日如意輪法六」の作成者と成立時期について検討する。「文化遺産データベース」⁽⁹⁾によれば、『門』原本の当初の巻数は未詳だが、現存巻数は百二十二巻であり、筆跡より尊円自筆本が二十八巻と認められ、この二十八巻を含む五十四巻の表紙の外題は尊円自筆と認められるという。原本写真の筆跡から、「文化遺産データベース」の説明はほぼ妥当である⁽¹⁰⁾と考える。

一方、現存の百二十二巻のうち、六十八巻は尊円自筆と認められていない。加えて、『門』は尊円死後に増補された部分もある。ゆえに、「長日如意輪法六」の作成者は尊円であるかどうか自明のことではなく、この点について検討が必要である。

結論からいえば、「長日如意輪法六」は尊円が文和元年（一三五二）に北朝の新天皇後光厳（同年八月に践祚）に進上したものの草稿であり、外題「護持僧条々」と見返しの記述は尊円自筆で、本文は他筆と考える。判断の根拠について、以下に説明する。

まず注目すべきは、「文和元年十二月下旬、書進 禁裏之草本也」という見返しの記述である。文和は北朝の年号である。この記述から、「長日如意輪法六」は文和元年に禁裏、すなわち北朝の後光厳天皇に献上したものの草稿であることが分かる。さらに、この見返しを記した人物が誰かを判定する手がかりがある。『門』全巻の写真帳を確認したところ、「長日如意輪法補一」（外題には「護持僧勘例」とあり、平安中期の朱雀天皇から鎌倉末期の後伏見天皇までの護持僧に関する勘例を集めたもの）の見返しにも、「長日如意輪法六」の見返しの記述と同筆で「文和元年十二月下旬、書進 禁裏之草本也」と書かれている。また、青蓮院門跡吉水藏聖教第七十五箱には尊円自筆

とされる『護持僧勘例』⁽¹¹⁾一卷があり、見返しには『門』「長日如意輪法補一」および「長日如意輪法六」の見返しの記述と同筆で「文和元年十二月下旬、書進 禁裏之草本也」と書かれている。さらに、「長日如意輪法補一」と吉水藏聖教にある『護持僧勘例』両史料の内容も筆跡も虫損の位置なども同一である。ゆえに、『門』「長日如意輪法補一」と吉水藏聖教にある『護持僧勘例』とは同一の史料をさしていると考えられる。⁽¹²⁾

以上の通り、「長日如意輪法六」と『護持僧勘例』両史料は、いずれも尊円自筆の「文和元年十二月下旬、書進 禁裏之草本也」という見返しの記述を持つ。したがって、両史料とも尊円が文和元年十二月に後光厳天皇に進上したものの草稿である。「長日如意輪法六」本文中では尊円の名のみ「円」の字を略して「尊」と表記している。これに対して、他の法親王の場合はすべて「○○親王」と表記しており、尊円が自分の名前を略記したと考えられる。すなわち、作成者は尊円であることが窺える。

次に見返し部分ではなく「長日如意輪法六」の本文が尊円の自筆であるかどうかについて検討する。冒頭の総目以降をみると、尊円以外の人物の筆跡と見られる。さらに、本文中では抹消・合点・修正などが多く見られるため、尊円が「長日如意輪法六」の本文を清書して自筆本を後光厳天皇に提出したと考えられる。すなわち、作成の主体は尊円であり、実際には尊円がほかの青蓮院僧に本文を書かせたのである。

次に成立時期を検討する。「長日如意輪法六」の記述内容の下限は、総目の②「代始護持僧事」の最後にある、観応元年（一三五〇）十月に尊円、良慶、賢俊が崇光即位後の代始護持僧となったことを示す記

事である。本記事は、崇光天皇を「新院」と記載しているため、崇光に上皇の尊号が奉られた観応二年十二月二十八日以降に成立したものである。

以上を踏まえて、「長日如意輪法六」は観応二年十二月二十八日から文和元年十二月下旬の間に成立したと判断できよう。

また、本史料中では「一院」(光厳。貞治三年(一一三六四)七月七日に死去する)・「院」(光明。康暦二年(一一三八〇)六月二十四日に死去する)・「新院」(崇光。応永五年(一一三九八)正月十三日に死去する)について記載がある。この時期の政治状況を整理すると、観応三年に北朝三上皇は南朝方に連れ去られたため、光厳・光明母広義門院が治天の役割を果たしている。このような政治状況の中で、後光厳天皇は三種の神器なしで即位した。⁽¹³⁾北朝三上皇の表記からみると、「長日如意輪法六」は彼らが存命した時期に成立したものであり、上述の成立時期と合致する。

本節の最後に「長日如意輪法六」と「門」との関係を見ていく。『門』原本の外題には、通例「門葉記」と記されている。⁽¹⁴⁾しかし、「長日如意輪法六」の外題には「門葉記 長日如意輪法六」とは記載されていない。加えて、「長日如意輪法三」、「長日如意輪法四」および「長日如意輪法五」(表紙に「護持僧補任⁽¹⁵⁾」と書かれている)の、これら三史料は、尊円没後に成立したものと考えられる。⁽¹⁵⁾そのため、「長日如意輪法」は段階的に成立した史料といえる。「長日如意輪法五」と「長日如意輪法六」は護持僧の関連史料として、尊円没後に成立した「長日如意輪法四」の後ろに組み込まれ、さらに表紙に巻の番号が加筆されたと推測される。膨大な量にわたる『門』の各巻の筆跡・内容・成立時期について、今後改めて検討されていく必要がある

ことを、ここでは強調しておきたい。

二、「長日如意輪法六」の近世写本

「長日如意輪法六」の写本としては、前述した『門』の近世写本のほかに、近世に書写された柳原家本と国立公文書館本がある。先行研究では、近世写本が使用されている。⁽¹⁶⁾

そこでインターネット上で確認した画像をもとにして、両写本を紹介する。

柳原家本は、宮内庁書陵部図書寮文庫に収蔵されている『護持僧記并勘例補任等記』一冊(函架番号柳一三二三)⁽¹⁷⁾のうちの「護持僧記」である。史料名の通り、「護持僧記」「護持僧勘例」「護持僧補任」の三史料からなる。

三史料と『門』との対応関係は、以下の通りである。

『護持僧条々』(「門」「長日如意輪法六」) ≡ 「護持僧記」

『護持僧勘例』(「門」「長日如意輪法補一」) ≡ 「護持僧勘例」

『護持僧補任』(「門」「長日如意輪法五」)のうち、尊意までの部分≡ 「護持僧補任」⁽¹⁸⁾

『護持僧補任』

表紙には「青蓮院尊円親王撰」とあり、「護持僧補任」末尾にあたる醍醐天皇期の山門僧尊意の記事の後ろに「按已上護持僧記同勘例補任大僧正入道尊円親王御筆」と記す。この記述によって、「長日如意輪法六」の作成者が尊円であることを改めて確認することができる。

『護持僧記并勘例補任等記』の奥書には、

右以三青蓮院宮本 写云、以二或人秘卷一令三書写二了、所々不審不
レ少、

加三愚存及朱二了、可三秘書、

寛政十一年二月上旬 (花押)
(柳原紀光)

とあり、この写本が寛政十一年（一七九九）に公卿柳原紀光によって書写されたものであることがわかる。

もう一つの国立公文書館本は、国立公文書館所蔵『護持僧記』（請求記号一四六—〇五四〇¹⁹）のうちの「護持僧記」の部分である。本史料の表紙に付された短冊状の題箋には「護持僧記 護持僧勘例 四十三丁」²⁰とあり、見返しの冒頭に「補任之部」と墨書されている。墨付け五丁である。一丁目表の上（天）に、「書籍館印」「内閣文庫」「日本政府図書」の朱印が各一顆が、右下（地）に「和学講談所」の墨印・「浅草文庫」の朱印が各一顆、捺されている。奥書には、「右護持僧記・同勘例・同補任以青蓮院宮御本一写之、京師乙丑本」と記す。

本写本の内容は柳原家本と同じであり、「護持僧記」「護持僧勘例」「護持僧補任」から成るため、両者の祖本、すなわち「青蓮院宮本」は同一のものと考えられる。「京師乙丑本」から、本写本の成立時期は貞享二年（一六八五）と推定できる²⁰。

本写本の伝来については、江戸後期に和学講談所に収蔵されており、明治初期に和学講談所が廃止された後に書籍館に移管され、書籍館の移転後に浅草文庫に移管され、後に内閣文庫に移管されたと思われる。両写本と『門』原本との関係についての検討は、今後の課題としたい。

おわりに

本稿では、『門』「長日如意輪法六」の内容・作成者・成立時期、『門』との関係およびその写本系統について論じてきた。今後は

『門』「長日如意輪法」の他巻についても史料論的な検討を行う予定である。ひとまず筆を擱きたい。

『付記1』青蓮院御門跡門主 東伏見慈晃院下より、『門葉記』「長日如意輪法六」の翻刻並びに史料紹介のご許諾をいただきました。末筆ながらここに記して心より感謝申し上げます。

『付記2』本稿の一部は、日本古文书学会第五十五回学術大会（長崎県対馬市厳原地区公民館大会議室）での大会報告をもとにする。

『付記3』本稿は、令和三年度東京大学史料編纂所RA及び二〇一七—二一年度科学研究費補助金（基盤研究（S））「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展—知的体系の構造伝来の解明」（17H06117 研究代表者：田島公）の学術専門職員としての研究成果の一部である。

『付記4』本稿は、令和五年度一般財団法人仏教学術振興会の研究助成金「中世前期における山門護持僧の出自・法流・修法活動—『門葉記』「長日如意輪法」を用いて—」の研究成果の一部である。

註

- （1）『国史大辞典』「門葉記」項、武覚超執筆。
- （2）尊円自筆本を含め、大部分は南北朝期に書写された『門』原本（重要文化財）は青蓮院門跡に所蔵されている。そのほかに所蔵されている一部の断簡もある、と指摘されている（山家浩樹「本所蔵「姉小路宮初度御院参記等」〔門葉記〕のうち」について『東京大学史料編纂所紀要』二、一九九二）。
- （3）この写本は文化年間（一八〇四—一八一八）に書写されたもの

であり、東京大学史料編纂所にはこの写本の謄写本が架蔵されている（請求記号二〇七二二一）。注2 山家論文を参照。

- (4) 『大日本史料』第六編第十七冊第三百四十五頁に「長日如意輪法六」の見返しの記述を掲載している。「長日如意輪法六」所収の古記録の逸文と類似の内容が、前巻『門』『長日如意輪法五』にも確認できる部分があり、これについては第一章で述べる。

- (5) 原本未見のため、正確な書誌情報は今後の課題としたい。

- (6) 安徳天皇の場合、「安徳天皇」と表記されている。

- (7) 所属宗派が記されていない者は、青蓮院道玄と梶井最助である。

- (8) 活字本『権記』（『史料纂集』と『増補史料大成』）には治安三年（一〇二三）六月の記事は確認できないため、「長日如意輪法六」所収の記事は逸文である。「長日如意輪法六」では、この記事の日付は六月十七日となっているが、前巻『門』『長日如意輪法五』では同じ記事の日付を六月十三日として載せている。この記事の干支「辛丑」から計算すると、六月九日が正しいか。『為房卿記』の記事は「長日如意輪法五」にも確認でき、『大日本史料』第三編第一冊七十頁に『門』『長日如意輪法五』所収の『為房卿記』の記事を引用している。「長日如意輪法六」所収の記事と比べると、文字の異同や記述の相違がややあり、両者を比較して活用すれば本来の記事をおおよそ復元することができる。

- (9) <https://bunkani.ac.jp/db/heritages/detail/15841>。最終閲覧は二〇二三年十二月一日。

- (10) 筆跡鑑定に際して、インターネット上で公開されている尊円自筆『門葉記』『寺領目録』（重要文化財。奈良国立博物館所蔵品）の画像を主に用いた。

- (11) 吉水藏聖教第七十五箱第十八号、東京大学史料編纂所探訪マイクロフィルム、請求記号 Hdup.M68。東京大学史料編纂所図書室端末のHiCAT Plusに画像を閲覧した（最終閲覧は二〇二四年三月十二日）。青蓮院聖教調査団編『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』（汲古書院、一九九九）によると、この聖教は尊円自筆という。

- (12) 『門』原本の撮影は一九五二年に行われ、吉水藏聖教第七十五箱の撮影は一九九〇年に行われたため、『護持僧勘例』は一九五二年の時点で『門』にあり、一九九〇年に吉水藏聖教にあることが確認できる。

- (13) 「正平一統」（正平六年（一三五一）に北朝側の足利尊氏が南朝に降伏し、北朝は一時的に廃れた事件）によって、北朝側にある三種の神器が南朝側に渡された。ただし翌年に「正平一統」が破綻した。後光厳天皇は治天が不在で神器もなしで即位したことから、正統性に乏しく、天皇の宗教的権威を高めるため尊円に護持僧および長日三壇御修法などについて尋ねた可能性がある。これについては、別稿で論じることしたい。

- (14) 注2 山家論文。

- (15) 「長日如意輪法三」と「長日如意輪法四」には尊円没後に弟子尊道が勤修した長日如意輪法についての記録が掲載されている。一方、「長日如意輪法五」は桓武天皇期から後小松天皇期までの護持僧補任情報を掲載しており、成立過程は非常に複雑である。紙幅の制約上、ここでは結論のみ記すと、「長日如意輪法五」は鎌倉中期の青蓮院道玄が作成し始め、尊円の手を経て、尊円没後に弟子尊玄および尊玄周辺の青蓮院僧侶が完成したのと考ええる。

- (16) 湯之上隆「護持僧の成立と歴史的背景」(『日本中世の政治権力と仏教』思文閣出版、二〇〇一。初出一九八一)。堀裕「護持僧と天皇」(大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質(古代・中世)』思文閣出版、一九九七)。

- (17) 東京大学史料編纂所HICAT Plusにて柳原家本の画像を閲覧した。最終閲覧は二〇二三年十二月一日。

- (18) 醍醐天皇期の尊意の記事の後ろの「按已上護持僧同勘例補任大僧正入道尊円親王御筆」に続いて、相当時期において、永徳二年(一三八一)十月の後小松天皇が大嘗会御禊行幸のために青蓮院道円に対して下された金輪法を勤修させる綸旨が収録されている。この記述前に「已下尊道親王加筆記述」とし、これは尊円弟子の尊道による加筆と判明する。

- (19) 国立公文書館デジタルアーカイブにて画像を閲覧した。最終閲覧は二〇二三年十二月一日。

- (20) 近世の乙丑年は、貞享二年、延享二年(二七四五)、文化二年(一八〇五)、元治二年(一八六五)がある。川瀬一馬氏は、水戸彰考館本『日本感霊録』の末尾の貼紙に記される「京師乙丑本」について、貞享二年と比定している(『現存「日本感霊録」について』『日本書誌学之研究』講談社、一九七二。初出一九四二)。西尾市岩瀬文庫所蔵『門葉記抜粹』の本編末(「入室出家受戒」の末)に「京師乙丑本為二一本」という奥書があり、さらに巻末(増補別本の末)に「右門葉記抄正慶元年山務拝堂記以下一冊、元禄三申之冬佐々宗淳獲之、京師謄写」とあるため、「京師乙丑本」は元禄三年(一六九〇)以前に成立したものと考えられよう。すなわち、乙丑年は川瀬氏が比定している貞享二年である。この

年に水戸彰考館で書写された史料を「京師乙丑本」と総称しているのである。『門葉記抜粹』の書誌は西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベース(二〇二三年十二月四日アクセス)を参照した。当史料は二〇二三年十二月二十日に岩瀬文庫で実見した。

【凡例】

- 一、翻刻にあたっては、本文の配列、改行、闕字・挿入・傍注等ではできるかぎり原本の体裁を保つようにした。
- 一、各項目間に空白があるが、翻刻では特に注記しない。
- 一、朱筆の部分は区別せずに翻刻した。
- 一、抹消文字に訂正文字や重ね書きが付されている場合、本文中に訂正文字や重ね書きはそのまま翻刻し、右傍に×をもって抹消文字を示し、左傍に・をもって訂正文字や重ね書きの箇所を示した。
- 一、抹消のみの場合、本文左傍にさをもって示した。
- 一、判読できない字は▯をもって示した。
- 一、本文中の合点は／で示した。
- 一、本文には新たに適宜読点、並列点を付した。
- 一、字体は常用漢字で翻刻した。
- 一、翻刻者注は()をもって示した。
- 一、同一人物の人名注は、初出の場合のみ付した。

【翻刻】

（表紙）

護持僧条々

六

（見返し）

文和元年十二月下旬

書進 禁裏之草

本也、

（本紙）

一、濫觴事

一、代始護持僧事

一、被仰護持僧事

親王補任之時以 勅使被仰例 被下 綸旨例

僧正補任之時以 綸旨被仰例

或帶 綸旨參向例

一、二間初參事

參上通路事

一、長日三壇御修法事

御請事

或勅使 或綸旨 代始宣旨 改臨時 綸旨

仰護持僧之宣旨礼紙載之例

御本尊事 支物事

花注連事 後加持事

御卷数事

一、護持勞事

三ヶ年一度奏事

不至三年被許其勞例

依勞超越上首転任例 讓勞任官内奉例

以護持勞讓先師例 募先代護持勞例

以春宮護持勞昇進例 以中宮護持勞昇進例

以女院護持勞昇進例

一、護持僧必勤修御祈事

一、護持僧供御調進事

一、加任護持僧事

被仰加任事

御教書

勅使

二間初參事 花注連事

恒例勤修御祈事 募功勞事

一、春宮護持僧事

被仰護持事 御祈事

（三行空白）

一、護持僧条々

一、濫觴事

・伝教大師 諱最澄、叡山根本大師、大唐順曉和尚弟子、

天台座主記云、延暦十六年為 公家護持僧、

是最初護持僧也、

内侍宣云、守護国家、利樂衆生云々、

・弘法大師 諱空海、東寺真言元祖、大唐惠果和尚弟子、

伝記云、毎年正月後七日息災壇増益御修法、并
毎月晦三ヶ日御念誦、亦十八日御前の観音供
等、皆是唐朝風也云々、

・慈覚大師

諱円仁、本朝伝教大師弟子、
大唐逢法全元政以下、八人師受學、

諡号勅書、朕昔以眇身頻接慈眼、恨護持之俄

隔、思崇飾而何窮、宜贈法印大和尚位、号慈覚

大師云々、

・智証大師

諱円珍、國城寺元祖、
日本慈覚大師・徳円和尚等弟子、
大唐法全阿闍梨弟子、

伝記云、貞観八年奏達持念壇于冷泉院、祝聖也云々、

大鏡物語云、清和御時、護持僧智証大師云々、

已上三流護持之元祖也、

從此以降、碩徳明匠奉 詔致 聖躬之護持、

粗雖有所見、所謂実惠僧都・遍昭僧正・

静観僧正等也、然而相統之儀、旧記頗幽玄也、

醍醐天皇御宇已来、大略継踵無絶、

醍醐朱雀

貞崇律師

尊意贈僧正 仁観律師

慈念僧正

実性僧都 慈恵大師

千攀律師

増恒律師 覚忍律師

暹賀僧都

興良律師 円賀大僧都

勸修律師

明豪僧正 俊観法橋

二、

代始護持僧事

新帝踐祚之後、被仰之、即位之前後、隨時不

同也、在別、兩度大儀相統之時者、即位已後被仰之、不爾者

為已前歟、

坊之時、護持僧大旨為其仁、先帝護持相統之輩

又多之、兩条勸例

・後三条院

治暦四年四月十九日受禪、
同七月廿一日即位、

・権律師覚尋

延久元年正月十四日不動法始行之、

・阿闍梨信覚

同日如意輪法始行之、

・阿闍梨成尊

同日延命法始行之、

・白河院

延久四年二月八日受禪、
同十二月廿九日即位、

盛算律師

文慶僧都

尋円大僧都

成秀律師

尋光大僧都

斎祇僧都

延尋大僧都

明快僧正

源泉大僧都

頼寿律師

仁暹大僧都

長守僧正等也、

後三条院御代、被撰三寺之高僧、令始修

長日三壇者御修法、其已後相統勸例等

委別記、

蓮海律師

睿効法橋

良円僧都

永慶律師

頼賢僧都

・^山權大僧都仁寛
延久五年七月一日如意輪法始行之、

隆明・寛意・増誉已下数輩、雖為護持僧、御修法
勤修之時分旧記不分明也、

・堀河院
寛徳三年十一月廿六日受禪、
同十二月廿九日即位、

・^山法印 仁源
寛治元年二月十九日延命法始行、

・^{寺門}法印權大僧都隆明
同日不動法始行、

・^{東寺}權少僧都義範
同日如意輪法始行、

・鳥羽院
嘉承二年七月十九日受禪、
同十二月一日即位、

・^山僧正 仁源
嘉承二年十二月廿二日為護持僧、

・權大僧都寛助
同日被仰之、

・^寺法眼 行尊
同日被仰之、

・崇徳院
保安四年正月廿八日受禪、
同二月十九日即位、

・^寺僧正 行尊
保安四年三月廿日御修法始行、

・^寺法印權大僧都増智
同日御修法始行、

仁実・寛助等同為護持僧、但修法開白等時分

旧記不分明、

・近衛院
永治元年十二月七日受禪、
同廿七日即位、

・^東僧正 信証
康治元年正月十五日為護持僧、

・^寺權僧正覚宗
同日被仰之、

・^山權僧正行玄
同日被仰之、

・後白河院
久寿二年七月廿三日受禪、
同十月廿七日即位、

例即位已前
例修法開白
・^寺僧正 行慶
久寿二年十月廿三日為護持僧、
即如意輪法始行、

・^東法印權大僧都寛遍
同時被仰之、
即延命法始行、

・^山權少僧都快修
同時被仰之、
即不動法始行、

・二條院
保元三年八月十一日受禪、
同十二月廿日即位、

例即位已前
例修法開白
・^山最雲 親王
保元三年十月四日為護持僧、
同十一月一日不動法始行、

・^寺大僧正行慶
同十月廿七日被仰之、
同十一月一日如意輪法始行、

・^東權僧正寛遍
同時被仰之、
同日延命法始行、

・六条院
永万元年六月廿五日受禪、
同七月廿七日即位、

・^寺大僧正 覚忠
永万元年七月五日為護持僧、
同十二月十五日如意輪法始行、

・^東前大僧正寛遍
同十月十二日被仰之、
同十二月十五日延命法始行、

・^山法印 明雲
同十月廿八日被仰之、
同十二月十五日不動法始行、

・高倉院
仁安三年二月十九日受禪、
同三月廿日即位、

・^山大僧正快修
仁安三年二月廿五日為護持僧、
同七月十二日不動法始行、

・^寺權僧正覚讃
同日被仰之、
同日延命法始行、

・^寺法印 房覚
同日被仰之、
同日如意輪法始行、

・安徳天皇
治承四年二月廿一日受禪、
同四月廿二日即位、

- ・^東大僧正禎喜
治承四年四月廿八日為護持僧、
同七月廿一日延命法始行、
- ・^山僧 正明雲
同日被仰之、
同日如意輪法始行、
- ・^寺僧 正房覚
同日被仰之、
同九月廿日被仰之、
同十月二日不動法始行、
- ・後鳥羽院
壽永二年八月廿日受禪、
元暦元年七月廿八日即位、
- ・^東權僧正定遍
壽永二年十月廿七日為護持僧、
元暦元年十二月廿六日延命法始行、
- ・^山前權僧正全玄
元暦元年八月 日被仰之、
同十二月廿六日如意輪法始行、
明雲庵主 入滅、
御所開白 替、
- ・^寺法印 実慶
同日被仰之、房覚僧正入滅、
御所開白 替、
同十二月廿六日不動法始行、
- ・土御門院
建久九年正月十一日受禪、
同三月三日即位、
- ・^東大僧正覚成
建久九年六月十九日延命法始行、
- ・^山權僧正弁雅
同日不動法始行、
- ・^山法印 真性
同日如意輪法始行、
- ・順徳院
承元四年十一月廿五日受禪、
同十二月廿八日即位、
- ・^東僧 正道尊
承元四年十二月十二日為護持僧、
同五年二月十七日延命法始行、
- ・^山權僧正承円
同日被仰之、
同日如意輪法始行、
- ・^寺權僧正道誉
同日被仰之、
同日不動法始行、
- ・後堀河院
承久三年七月九日受禪、
同十二月一日即位、
- ・^山尊性 親王
承久三年十二月十八日為護持僧、
同廿一日如意輪法始行、
- ・^東大僧正道尊
同日被仰之、
同日延命法始行、
- ・^山權僧正仁慶
同日被仰之、
同日不動法始行、
- ・四條院
貞永元年十月四日受禪、
同十二月五日即位、
- ・^山二品尊性親王
例修即位已前
例法開白
貞永元年十月廿九日如意輪法始行、
- ・^寺大僧正良尊
同日不動法始行、
- ・^東僧 正親嚴
同日延命法始行、
- ・後嵯峨院
仁治三年正月廿日受禪、
同三月十八日即位、
- ・^寺前大僧正円浄
仁治三年三月廿九日為護持僧、
即不動法始行、
- ・^山僧 正慈源
同日被仰之、
即如意輪法始行、
- ・^東僧 正嚴海
同日被仰之、
同七月廿二日延命法始行、
- ・後深草院
寛元四年正月廿九日受禪、
同三月十一日即位、
- ・^寺覚仁 親王
寛元四年二月九日為護持僧、
不動法勤修、
- ・^東前大僧正良恵
同三月 日被仰之、
延命法勤修、
- ・^山僧 正慈源
同三月 日被仰之、
如意輪法勤修、
- ・龜山院
正元三年十一月廿六日受禪、
同廿八日即位、
- ・^山尊助 親王
文応元年四月廿七日如意輪法始行、
- ・^寺仁 助 親王
同日不動法始行、
- ・^東僧 正房円
同日延命法始行、
- ・後宇多院
文永十一年正月廿六日受禪、
同三月廿六日即位、

令修延命法之間、寺門一人尤可被略之處、堅又依申子細、被並修不動法二壇畢、三壇被。並事初例也、

院 (光明)
建武三年八月十五日。受禪。
同四年十二月廿八日即位。

尊一 (踐祚)
建武四年六月廿五日為護持僧、
同五年十月廿二日如意輪法始行、

准三宮前大僧正道昭 (寺)
同日被仰之、
同日不動法始行、

前大僧正成助 (東)
同日被仰之、
同日延命法始行、

新院 (靈光)
貞和四年十月廿七日受禪、
同五年十二月廿六日即位、

尊一 (尊)
貞和五年正月廿九日為護持僧、
觀應元年十月十四日如意輪法始行、

前大僧正良慶 (寺)
同日被仰之、
同日不動法始行、

前大僧正賢俊 (東)
同日被仰之、
同日延命法始行、

被仰護持事

親王補任之時、以勅使 (五位) 藏人被仰之、

二品尊性親王 (平) 承久三年親長參向、

道覺親王 (藤原) 宝治元年宗雅參向、

二品尊助親王 (藤原) 文應元年經業參向、

尊一 (平) 元弘元年建武四年同度共親名來仰、
貞和五年俊冬為勅使、

或被下 綸旨

二品尊性親王安貞補任之時、信盛書遣綸旨、

彼親王記云、太無礼也、但後日參申云々、

慈助親王正應補任之時如此、依公事計会不參

申、恐存之由、信輔後日參謝云々、

二品慈道親王正和補任之時、又如此、斯時尤可令持參之處、難治之由別而載書狀畢、彼宣旨云、

被 綸旨稱、可令候二間夜居之由、宜遣仰者、

綸旨如此、以此旨可令申入座主宮給、仍執達如件、

二月十八日 左衛門佐資朝 (百聖)

謹上 大納言法印御房 (敬守)

僧正已下補任多分以 綸旨被仰之、

公澄僧正乾元々年補任之時、被仰之宣旨云、

被 綸旨稱、可祇候二間夜居之由、宜遣仰者、

綸旨如此、仍上啓如件、

十一月廿五日 兵部大輔經世奉 (功越)

謹奉 左大臣僧正御房

逐上啓

則可令勤修長日如意輪法給、支度可令

注進之由、同其沙汰候也、

或帶 綸旨參向

道玄准后正安三年 宣下云、

被 綸旨稱、可祇候二間夜居之由、宜遣仰者、

綸旨如此、悉之、經世誠恐頓首、謹言、

四月廿一日 兵部大輔經世奉

進上 法性寺座主前大僧正御房 政所

彼時記云、右綸旨經世持來云々、

二、二間初參事

被仰護持之後必參仕之、此只參。長日御修法開白已後

不及御加持

令參仕之後（折）加持可奉仕也、彼時勤修召具之、

・參上之時通道事

人々所為不一准、面々定存一義歟、

親範卿記云、

一説、

入上東・朔平・玄輝門、經弘徽殿西・瀧口戸昇清涼

殿北階、參二間、於瀧口戸辺置火於香炉、

一説

於待賢門階外下車、入修明門・陰明門、經藏人町

西・月華門并橋・弓場内入明義門・仙華門、著草鞋、

持三衣・香炉昇長橋、經簀子參候二間、頭若五位

藏人引導之、奏聞次自御對面、頃之經本路退出、

共僧綱已下留居弓場殿、

一説、

入待賢・修明・陰明門、經御湯殿介瀧口戸昇清涼殿

北階或荻戸階、參二間、

已上、

（二行空白）

道覺親王

二条西行、於西洞院面北門前橋下車、去十二月牛車事、有宣下故也、

即經此門并五節所西令登南殿、御後雲客七八許

輩取紙燭參儲此辺、助修六人相隨、經御後簀子

參入、次御加持作法如常、事訖退出、已上親王宝治元年記、被記

此時内裏閑院殿也、西洞院面者御所之東左衛門陣也、

二品慈道親王

任宝治例、入左衛門陣、於和德門前申入事由之

後入彼門、昇紫宸殿良階、經露台渡長橋、

參清涼殿二間、

此時内裏富小路殿也、左衛門陣者京極面也、

明雲座主

入自瀧口、到清涼殿東庭、昇自御殿階云々、

尊性親王

慈嚴僧正

入月華門、經下侍東辺入明義門及仙花門、

昇自長橋云々、

円満院尊悟親王

昇自瀧口、經黒戸參入云々、

已上、古今自他門所為不同、大概如此、

長日三壇御修法事

後三条院御宇、殊有其沙汰、被始修之、

不動法山門 權律師覺尋

如意輪法東寺 阿闍梨信覺

延命法東寺 阿闍梨成尊

治曆五年正月十四日、於大内始修之、旧儀如此、

然而中古已來於本坊始行之、而道玄准后・

慈道親王等常移道場於 禁中令勤之、

存古風者歟、

御修法從此已後、于今相統面々応其清撰者也、

如近来 勅喚之、如意輪山門・延命東寺・不動園城寺

必以三流之僧被修三ヶ法、但又近古例僧不
准者也、勘例
在別

・御請事、或、勅使或、綸旨等、先例不同也、
慈源僧正仁治三年代始、宣旨云、

被、綸旨称、自来月廿三日可被始行長日三壇

御修法、如意輪法可勤修之由、宜遣仰者、

綸旨如此、悉之、謹狀、顯雅恐惶頓首謹言、

三月卅日、勘解由次官藤原顯雅奉

進上、天台座主御房政所

追言上

支度可被召進候、重恐惶謹言、

慈道親王正和四年二月十八日被仰護持僧、同廿日御

修法改修之時、綸旨云、

長日如意輪法自来廿七日可有御勤修之由

天氣所候也、以此旨可令申入座主宮給、依執達

如件、

二月廿日

左衛門佐資朝

謹上、大納言法印御房

追申

御支度者可令進給候也、同可令申入給、

尊一、元弘勤修之時、補任親名来仰之、

曆応勤修之時、補任宗光書送、綸旨云、

自来月九日可被行如意輪法、可令勤修之由

天氣所候也、以此旨可令申入青蓮院宮給、仍執達如件、

九月廿二日

左兵衛佐宗光

謹上、勘案左大臣法印御房

追申

支度任何可被召進候也、

公澄僧正乾元々年護持僧補任、能可綸旨。礼昏

載之、文章
見右

可勤修長日如意輪法支度可注進哉

・御本尊事

御代始必被新図也、仍彼時護持僧兼日仰絵所

致其沙汰、形像等随尊有子細、当流殊所相承来也、

諸流又定有口伝欺、調様二幅也、四方縁用赤地錦、

有裏、絹上有釣軸、御修法開白当日奉渡之、被渡阿闍梨坊

六位藏人為、勅使、此時御衣同被渡之、又移修御修

法之時、兩種共被渡彼阿闍梨坊也、

道玄准后記云、代始被新図御本尊一日中図絵、先

例也云々、

為房卿記云、勘案応徳四年寛治元年二月十九日、寅、今日公家被

始長日御祈、仍被図御佛三体、不動、如意輪、延命御衣絹内藏

寮所進、依別儀殿下給之、先是、召陰陽頭国随令

勘申日時、兼定僧名、壽命經御説經六口、仁王經六口定畢即宣下、

上卿又被始不動權大僧都
降明・延命法印
仁源・如意輪權少僧都
義範等法、

兼召加夜居僧二口、法印増誉、律師良意御修法闍梨三口同可参仕

二間者也云々、

・支物事

任阿闍梨進支度之旨被調下之、木具者木工寮・修理職等沙汰、鋪設者掃部寮所役歟、而近來以料足被下行事有之、非本儀之間、行事僧類申子細也、

・花注連事

御修法。於本房勤修之時、門之梁懸之、開白翌朝大旨引之、御衣奉安置問者如此也、護持僧不辭之、修法渡他所之時、卷収之也、其様有故実此時則可為加任護持僧也、

・後加持事

御修法修中毎月兩三度許令參上之条、本儀也、然而近來頗不及其沙汰歟、不仕之至也、若他御修法參勤之時者、彼御修法後加持已前必先如意輪御加持勤之也、正壇護持僧不參長日御修法、後加持以前他法御加持不令奉仕之故也、

凡暴風雷雨之時、為護持僧之仁令參内、可奉加持玉体也、

・卷数事

脱履之時、護持僧奏之也、此時御本尊即奉卷収之、渡正壇、御修法於他人之時歟、不可奏之、御衣御本尊許奉渡也、是阿闍梨雖相替、御願相統之間、非結願之儀故也、

護持勞事

三ヶ年一度奏之、故実也、史記云、三歳一考功文叶此意歟、

所謂今年某月補其職之後、次歳一ヶ年積勞了、翌年募申之也、而宿老高德之仁被抽賞之時者、每年被仰之事有之、勘例在左、

・不至三年被許其勞例

後三条院

治暦四年四月十九日受禪、同七月廿一日即位、同五年正月十四日三壇御修法始行、同五月廿五日依勞昇進、

權少僧都覺尋

護持賞、翌年又転權大僧都、同貫

權律師 頼範

護持勞、

成尊

護持勞、

法眼 信覚

御祈勞、護持僧也、

大概一見如此此外古今例多云々

・依勞超越上首転任例

已上以僧綱補任注之追委可勘之

權少僧都覺尋

延久元年五月廿五日転任、護持賞、超公覺・良深、

同二年五月九日転權大僧都、御持僧賞、超五人、

權少僧都頼範

延久三年十二月卅日転任、護持勞、超五人、

權少僧都増誉

承保元年十二月廿七日任、護持僧賞、超五人、

權少僧都尋源

承保三年十二月十九日任、護持勞、超六人、

權大僧都斎覚

承暦元年正月十四日転任、護持僧賞、超五人、

是又計御例也

大概所見如此不違前論

・讓勞任官内奉例

古今之例不可勝計、不能勘録、

(一行空白)

・以護持勞讓先師例

行成卿記云、治安三年六月十七日、(藤原)
(權記) 丑辛、故阿闍梨賀秀

被贈大僧都、法性寺座主慶命本師也、慶命者

今上護持僧、仍須被勳賞也、而依申請被賞

彼先師云々、

・募前代護持勞例

權僧正快修

保元三年十二月廿九日任、
二条院即位已後、
太上天皇在位之時護持僧勞、
越三人云々、

・以春宮護持勞昇進例

權律師 成典 寛仁三年十月廿日任、東宮護持勞、

權大僧都觀教 長和元年三月十四日任、東宮護持賞、

權律師 頼寿 長元六年十二月廿二日任、春宮護持勞、

・以中宮護持勞昇進例

權律師 盛筭 寛弘七年八月廿一日任、中宮護持勞、

法橋 頼命 長和四年十二月廿日叙、中宮護持賞、

權律師 喜源 承保三年十二月十九日任、中宮護持賞、

・依以女院護持勞昇進例

權律師 頼覚 延久四年十一月廿九日任、陽明門院護持勞、

已上大概所見如斯、於連綿例者、不違

羅縷、

二一、

護持僧必勤修御祈事

御禊行幸御祈勤之、本尊依時可有不同、然而。近來大旨

金輪法山門・不動法寺門等被行之、於本坊修之、
拜行路奉加持玉体、是故実也、

除目歲末御修法不動法勤之、
於本坊修之、
於本坊修之、

此等御祈支具可募申任官功之由、近來大旨被仰之歟、

災旱之時、水天供。勤之、
於本坊修
加任護持僧加其人数被並數壇之時、又非
護持僧之仁被召加之、例也於本坊修也

有法驗者被下 叡感綸旨也、

道玄准后弘安七年勤行之時、宣旨云、

被 綸旨称、水天供事、立依月華之離畢、兼知

秋稼之成雲、修中甘澍民間、普潤法驗之至、

叡感尤除之由、宜仰遣者、

綸旨如此、悉之、謹狀、(広橋)兼仲頓首謹言、

六月廿七日 治部少輔兼仲奉

進上 十楽院前大僧正御房政所

此外古今之例、不能具載、

護持僧供御調進事

禁中供御備進者、撰錄臣・侍読儒・御乳父等之

外俗中猶以不容易歟、況僧侶哉、然而於護持僧

者調進定例也、但於御飯者略之、精進御菜并

菓子等許也、能々奉加持所進之也、

加任護持僧事

長日御修法勤修之時、号正壇護持僧、其外只候

二間夜居之輩以之各加任、人数隨時不定也、

凡三壇勤仕仁者、依真俗之器用有當時之採扱、

近來大旨三流弘・慈・智以各一人被令修之、其外或知法

二一、

二一、

名譽行學修練之類、或伝護持相統之跡、或有
当代朝獎之寄之輩、被召加護持也、

・被仰加任事其時分正壇御修法開白前後
各有其例

大略以 綸旨被仰之、文章不異正壇也、

道玄准后弘長二年三月一日加護持 宣旨云、

被 綸旨称、可令候二間夜居給者、

綸言如此、忠方誠恐謹言、

二月廿九日 左少弁藤原忠方奉

進上 十樂院僧正御房

慈玄僧正正應二年十二補此職、 宣旨云、

被 綸旨、可候夜居之由、宜遣仰者、

綸言如此、以此旨可令洩申給、俊光誠恐頓首、謹言、

十二月八日 右少弁俊光上

進上 妙香院新僧正御房政所

此 綸旨二間字不書之、頗似坊護持歟、但正和

慈道親王補任之時、資朝不載此字之間、問答子細之

所、資宣・俊光等卿如此書之、仍存父祖之例也、然而

隨示賜之旨任常儀事改之云々、然者此事為

彼家之所存者歟、

或以勅使可被仰之、宜隨人者哉、

・二間初參事

加。護持 宣下之後必可令參仕、通道等不可違正壇也、

追雖加正壇、重而不可有初參之儀也、又臨時御修法等

承修之時、相具助修參上二間奉仕御加持也、但二間初參

以前者雖勤修御祈、不令參御加持也、

・花注進事

臨時御祈於本坊勤行之時、奉渡御衣者、其間可引

之、結願已後、御衣奉返入者卷置之也、其様有
故実

・勤修御祈事

除日歲末御修法等修之、

水天供五壇或七壇・十壇等被並修之間、大旨勤之也、必

非護持僧之仁又隨時被召加人数也

・募功劳事

於加任者、積三四ヶ年護持勞可奏之歟、

春宮護持僧事

立坊已前兼日殊撰知法之高僧、被可令候夜居之

由被仰之、此仁立太子之時必令參候也、

次立坊御祈御修法阿闍梨同被採用三流之明匠、一寺

各一人許歟、此仁又大旨為護持僧、於夜居僧者御修法

大旨勤修之也、但或不然事有之、

追又被召加護持僧之時者、無定人数、隨時被仰之、於

坊者不被行長日御修法之間、無正壇加任之列、只最前

被仰之仁可被清選歟、

・被仰護持事

宮司之内、亮・大進等常仰之、親王僧正已下差別

不可異 禁中歟、

慈玄僧正永仁六年 後伏見院坊時被仰護持被仰之令旨云、

可令候夜居給者、依

春宮令旨、言上如件、雅任誠恐頓首謹言、(藤原)

四月十三日

權大進雅任上

進上 青蓮院前大僧正御房政所

尊一貞和五年二月七日亮仲房朝臣為(万里小路) 勅使來、仰之、

・御祈事

立坊御祈禱大夫必奉行之、或時金輪・仏眼或愛染王・

不動三ヶ御修法、近代、後深草・伏見・後伏見・一院・院・新院等御例 或時五壇法

近代、龜山・後宇多
後二条・後醍醐御例 被行之、大略於御所
中修之 此外護摩供等両

三壇被修之、大旨於本坊
勤之

又歲末御修法有之、護持僧必令承修也、